

嫗山姥

嫗くろわなの段

「ッナエ 松浦まつらがた、領巾ひれ振る山の石よりも、積もる思ひは猶重き、岩倉の大納言兼冬卿の御娘おむすめ沢瀉姫と申せしは、源の頼光ちかひと御縁ごえん辺の契約も、互ひに待てば久方の、月日重なり年も経ち、情け盛りも徒らに、右大将高藤たかふじが讒言ざんげん故、頼光は行方なく、御文ごふみの音信さへ枯野に弱る秋の虫、世に便りなき憂き臥しに、

『もし御短慮の事もや』と、お寝間ねまの奉行寝ずの番、女中の外ほかは男交ぜずの大役は、女護の島に異ならぬ。

お局の藤浪、御傍ごそばに立ち寄り、

藤浪「のうこゝなお子、なぜに浮きくゝなされませぬ。

これ程大勢集つて浮世話の高笑ひも、皆お前を勇めのため、お煩ひでも出た時は、親御様へ御不孝。日頃のお気には似合ひませぬ」

と、勇められても

勇まぬ顔、

姫「ア、また局の気詰まりな異見聞いけんきとうない。日本の花紅葉を今この庭に移しても、なんの心が勇もうぞ。吉日きちじつ極まり頼光様へ嫁入りして、今頃はお腹に帯をも結ぶ筈を、あの右大将づらめに妨げられ、あまつさへお行方知れず。どこを当て処どに一筆ひとふでの、問はせの文さへ長枕。この長の夜よを誰と寝よ。おりや泣くまいと思へども、涙がどうも堪忍こらせぬ、堪えてたも」

とはらくと、玉を貫く御目元

腰元、茶の間、仲居まで、『お道理様や』と諸共に、貰ひ涙にくれければ。

お局は、気の毒がり、

藤浪「オ、なんぞいの、お力は付けもせず、そなた衆までろくゝと忌々いまいましい、措おいてたも。ヤア、それはそうと、煙草売りの源七は未だ見えぬか。気さく者の通者、今にも来たらお姫様まじくらに、迎ひ鬼して遊ぶまいか」

腰元「こりや氣の変つた思ひ付き、早う煙草が来たれかし」

腰元「煙草、煙草」

と待つ背の、松葉煙草の柔らこき、女中

（オクリ）仲間ぞ、賑はしき。

昔は色に登り詰め、今は浮世に下り坂田の時行と、埋もれし名も父の仇晴らさんと思ふ志、厭あかぬ夫婦の仲をさへ、三行半の生き別れ、袖は涙の革行李かわづりを今は身過ぎと引つ担げ、

源七「刻み煙草、油引かず」

と売り歩く。

腰元「そりや煙草が来たは」

と腰元中、

腰元「早うく」

と呼び入れ、

更科「これく源七、まつこの革籠かわごは預かる。尻からげも下しやいの。お姫様より御意がある。そなたも以

前は歴々で悪性故に仕損ひ、その形になりやつたげな。傾城とやら廓とやら、大内には珍らしき三味線の一曲を常々のお望み故、これ、三味線も調へ置く。サアく所望」

とありければ、

源七「ア、つがもない。尤も以前は傾城の一つ買ひも仕り、三味線、胡弓、浄瑠璃、文作、のら一卷の諸芸なら、こつちへ任せて奥座敷に、吉野の山の連れ弾きも、昨日の昔今日はまた、吉野煙草の刻み売り、股引がけで三味線とは、茶漬けに鯉のお望み、ひらさら御免」

と逃げ出づるを。

女房達引き止めて、

更科「ソレく、その言ひ様がもう面白い。何を言ふもお氣慰め、ひらに頼む」

と強ひられ、

源七、下地好きの道、

源七「ヤ、てつばの皮やりませう」

と、箱より出だす三味線の、

「糸は昔に変わねど、弾くその主の成れの果て、親の

撥駒紙駒の、音色優しく弾きなせり

紙衣の袖に置く露と、共に離れし妹背の中、哀れ昔は全盛の、松の位も冬枯れし、風呂敷包み行く先は、知らぬ旅路にとぼくと、築地の蔭に休らへば。

八重「ヤア、珍らしい三味線、なんぼ大内方でも」

洒落の浮世に廻り来る、車寄せより立ち聞けば、

八重「ハア不思議や、あの小唄は、我が身廊に在りし時、坂田の藏人時行殿に馴れ初め、作り出だせし替唱歌。かの人ならで誰が伝へた懷しや。どうぞ入り込み、見たいものぢや」

と、出放題に声張り上げ。

八重「サア、これは浪速の遊女町に、誰知らぬ者もない傾城の祐筆。濡れ一通りの状文なら、恐らく私が一筆で、叶はぬ恋も仮名書き筆、びらりしやらりとかすり墨、生娘、遊女、妾者、後家、尼、人の女房まで、段々の書き分けは、私が家の伝授事。もし、

そんな御用なら、お頼みあれ」

とぞ、言ひ入れたる。

奥には女中耳を澄まし、

藤濃「さつても変つた売り物。いざ呼び入れて痴話文書かせてお慰み。更科、歌門、呼んでおぢや」

豊元「アイ」

と答へて、二人連れにて走り出で。

鬻「これのう、傾城の祐筆殿はこなたか。この御殿の

姫君、何やらそまじに御用あり。こなたへいざ」と手を取れば、

八重「ハア、御用とは何ならん、お目もじ様に」

と夕顔の、庭の飛石すなくく、ちよこくくと奥座敷へ、なんの遠慮も並みぬたる、内裏女郎に場打てせぬ、いづれそれ者と見えにけり。

煙草売りの源七も、何心なく傍近く、顔と顔とを見合はすれば、

源七「ヤア、離別せし女房、南無三寶」

と木隠れの、

女はそれと『水臭き、男畜生人でなし。赤恥かゝせて退

けうか』と、飛び立つ胸も人目の関、押し鎮め押し鎮め、心を碎き折々に、尻目に睨むも恋なれや。

姫君なんの気も付かず、

姫「これのう紙衣、そなたの物腰襷はづれ、如何様常の女子でなし。そうした形になりやつたは、定めし深い訳あらん。一河の流れも他生の縁、包まず語りや」

とありければ、

八重「ア、どなたかは、お優しいお詞。お尋ねなくとも言ひとうて言ひとうて胸のたぐる折しも、さらばお話し申しませう。恥づかしながら、私が昔は浮き河竹の傾城。萩野家の八重桐とて、太夫仲間の立者と言はれし程の全盛の、末も遂げぬ仇恋に、登り詰めてこの通り。夜なく変わる大尽の、中にも坂田の某とて、水揚げの初日より、ふと逢ひ初めて丸三年、何が互ひの浮気盛り、登る程に登る程に、切利天の中二階夜昼なしの床入りに、掛け鯛様と異名を受け、水も

洩らさぬ中なりしに。また同じ廊に小田巻といふ太夫、かの男に行き付いて、毎日百通二百通。書きも書いたり痴話文は、大方馬に七駄半、船に積んだら千石船、車に載せたらえいやらさ。木遣りでも音頭でも、折つても呪ふても、微塵けもない二人が中、いよく募つて逢ふ程に。小田巻大きに腹を立て、ア、忘れもせぬ八月の十八日の雨上がり、月は山より朧ろ染めの、打掛ひらりと取つて捨て、白無垢一つに引つしごき、脛も頭はに駆け来たり、私が膝にふうはり。とんと居かゝつて、『これ八重桐、あんまり見られぬ嫌ぢやぞや。サ、男をたもるか、たもらぬか、嫌か応か、応か嫌か、二つ一つの返答が聞きたい』と胸尽くしを引つ掴む。こつちも一期の大事ぞと弱みを見せず、『こりや、小田巻とやら管巻とやら、光は喰はぬ、出直しや。この広い日本にあの人ならで男はないか。よし、ないにせよあるにせよ、それ程ゆかしい男なら、なぜに先に惚れなんだ。男盗人生傾城』と、言ひ様取つて投げ付くれば、明り障子打ち破り、継三味

線を踏み砕き、縁より下へころろと、這ひ柏槇まで駆けかゝり、木斛、南天、めつきり、めつきり、切り石の上へ真俯け、鼻血は一石六斗三升五合五勺。『そりやこそ喧嘩が始つた。大事のこつちの太夫さんに、ひけを付けては叶ふまい。加勢をやれ』と言ふ程に、遣り手、引き船、仲居、飯炊き、出入りの座頭、按摩取り、巫女山伏に占屋さん、雪駄片しに下駄片し、草鞋掛けで来るもあり。台所から座敷まで、『太夫さんの仕返し』と、あそこでは叩き合ひ、こゝでは打ち合ひ踊り合ひ、茶棚、竈、煙草盆、当たる物を幸ひに、打ちめぐ、打ち割る、踏み砕く。めりくくびしやりと鳴る音に、『そりや地震よ雷よ、世直し桑原々々』と、我れ先にと逃げ様に、水担桶盥に駆けかゝり、座敷も庭も水だらけになる程に、『南無三、津波が打つて来るは、のう悲しや』と喚くやら、秘蔵の子猫を馬程な鼠が喰はへて駆け出すやら、屋根では鼯が踊るやら、神武以来の怪気争ひ、この事世上に隠れなく。かの男はその場より、親御様の勘当受

け、我が身も廓を夜抜けして、根本恋路の浮き名取る、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帯のその日過ぎ、男め故でござんする。ア、あんまり喋つて息が切れた。これ、お茶一つ下さんせ」

とぞ、語りける。

姫君を初め腰元衆、

皆「さて心中の女郎や。たとへ如何なる身になつても、思ふ男と添ふからは、面白からう」と宣へば、

八重「されば、末を聞いて下さんせ。その男のてゝ親が闇討ちに討たれ、敵討たねば叶はぬと私とは縁を切り、行方ものう別れて、親の敵を狙ふとは、跡形もない赤嘘。我が身に秋風立ちけれども、何をしほに退かれもせず、親御様の死なしやんしたを究竟一の託けに、敵討つとの口上は釈迦でも一杯参る事。まんまと私を謀り、女房には紙衣を着せ、その身はちやんと栄耀らしい、若い女中に立ち交り、三味線弾いておけつかり、くさりくさるを見る様な、日本国の姫御前の

因果を一つに固めても、我が身には及ぶまい。初対面

の皆様へ、在りし昔の懺悔話。お恥づかしや」

とばかりにて、おろろ涙にくれければ。

姫「オ、道理々々、身にかゝらぬこちとさへ、煙とうて堪られぬ。さりながら、構へて短気な心を持ちやんなや。まだ話したい事もあり、奥へ通せ」

と姫君は、御簾の内に入り給へば、

腰元「サア苦しくない、奥へおぢや、こちへく」

と人々は、皆々、一間に入り給ふ。

後見送つて八重桐、

八重「さらば奥へ参つて憎さも憎し男の懺悔、言ふて退けん」

と入らんとするを、

時行取つて引き戻し、はつたと睨め、

時行「チエ、さすがは流れの女子ぢやな。親の敵を討つまでと、相対尽くの離別ならずや。只今の詞は誰に言ふ当て事。未だ敵の行方は知れず、心を砕く夫の体、哀れとも思はずおのれが栄耀に引き当てゝ面白そ

うな仇口、エ、恨めしや」

とばかりにて、無念涙にくれければ、

八重「オホ、く、く、あのまがくくしい顔はいの。これ、親の敵は幾人あるぞ。こなたの妹御糸萩殿とやらんが、先月二十三日、小夜の中山で討ち給ふ物部の平太は、敵ではないかいの」

時行『ハッ』と驚き

時行「ナニ、妹が敵平太を討つたるとは、必定か」

八重「サア、定か真か、碓氷の荒童といふ人を語らひ、易々と討つて源の頼光様を頼み駆け込みしとは、日本に隠れない。忝くも頼光様、妹御を匿ひ給ふ遺恨によつて、右衛門の頭平の正盛、清原の右大将と心を合はせ、頼光様を讒訴し勅勘の身となり給ふ。これ程大きな騒動を、今まで知らぬとは狼狽者の浮き名を世間へ触れうといふことか。エ、疎ましい世に連れて、心までが腐つたか」

と、縫り付いて泣きければ、

時行突つ立ち、

時行「さては、敵故頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され、親の敵は討たずとも、正盛右大将は敵の敵なり。いで、二人が首取つて頼光の御恩報じ苗字の恥を雪がん」

と躍り出づるを

引き止め、

八重「ソレ／＼／＼、それは悉皆氣遣ひか。討つに討たるゝ程ならば、頼光様に油断があらうか。彼等は威勢真最中、討たれぬ子細があればこそ、日蔭の御身となり給ふ。こなたが今駆け出して、心易う首取らうとは、重ねて恥がかきたいか。これ、こなたが今まで悪戯で、娘をころりと墮したと、首をころりと落とすとは、雲泥万里」

と、恥ぢしむる。

時行道理に責められて、行きつ戻りつ齒噛みをなし、拳を握り立つたりしが、

時行「もうこの上の分別なし」

と革籠の内より氷の様な鎧通し押つ取つて、腹にぐ

つと突き立つる

女房

八重「これは狂気か」

と縋り付けば、

時行「ア、音高し、音高し。おことが今の悪言は、伍子胥が呉王を諫めたる金言より猶重し。恐らくこの一念、項羽紀信が勇氣にも劣るまじと思へども、時来たらねば力なし。それまでまだ／＼存らへ、臆病者腰抜けと指差されんは、無念の上の無念なり。我れ死して三日が内、御身が胎内に苦しみあれば、我が魂宿りしと心得、十月を待つて誕生せよ。神変希代の勇力の男子となつて今一度人界に生まれ出で、正盛右大将を亡ぼさん。おことが身も今日よりは常の女子に事代はり、飛行通力あるべきぞや。深山深谷を住み家とし生るゝ子を養育せよ。さらば、さらば」

と諸共に、剣を抜けば紅の、血は夕立を争ひし最期の念ぞ凄じき。

あら不思議や切り口より、焔の塊女房が、口に入れ

ば『ウン』とばかり、その儘息は絶えてけり。

かゝる所に正盛が郎党太田の太郎、家来引き連れ追つ取り巻き、

太郎「ヤア／＼兼冬、右大将高藤公より汝が姫を召さるれども、頼光と縁組むとて承引なき条、憚り千萬。それによつて、『姫を引つ立て来たるべし』との御使ひ、乱れ入つて奪ひ取れ」

と、喚き叫ぶその声に、

伏したる女むつくと起き、表に立つたる奴ばらを、取つては投げ取つては投げ、姫君の在します御簾を囲ふて立つたるは、さながら鬼女の如くなり。

太郎「ヤア数にも足らぬ下司女、何事か仕出ださん。あれ引き出だせ」

と下知すれば、

声を力に数多の家来喚き叫んで、皆散り散りに、落ち失せけり。

八重「才、さもそうず、さもあらん。我が魂は玉の緒の、御命恙なく、行く末待たせ在しませ」

と姫君に一礼し、

八重「今よりは、我れ何処をそこ」

と白妙の、三十二相の容顔も、

怒れる眼物凄く、島田解けて逆様に、忽ち夜叉の鬼瓦。

唐門、楼門、四つ足門、

塀も築地も飛び越え、跳ね越え、跳ね越え飛び越え雲を分け、行方も知らずなりにけり